

双方向型月刊キュレーションメルマガ
“コロナ禍×イノベーション×地方創生”
2021年2月1日 #11

編集発行人: Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元: Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

本メルマガは、Japa 日本専門家活動協会が 2020 年 4 月 1 日より毎月 1 日に発行する有料版の月刊キュレーションメルマガ「イノベーション×地方創生」としてスタートしましたが、今般のコロナ禍を受け、コロナ禍の状況、影響、対応等に強い関心が寄せられているため、よりコロナ禍を意識した「コロナ禍×イノベーション×地方創生」に拡大し、Japa 会員、寄稿者、及び会員・寄稿者の紹介による関心者の方々に、当面の間、無料配信及び HP で公開することに致しました。

本メルマガは、双方向型の意見交換・交流等を目指しています。メルマガの各コーナーの内容に関するご意見等をお寄せ下さい。本メルマガを契機として、読者間の交流促進が進むことを期待しています。忌憚のないご意見、お問い合わせ等をお待ちしています。

INDEX

1. コラム「論点提起」：コロナ禍(Risk)をチャンスにできるか如何
2. キュレーション「関連情報&Topics」：コロナ禍×イノベーション×地方創生
3. 紹介「海外に学ぶ」：芸術ハコモノでイメージ転換再生 スペイン・ビルバオ その2
(Japa 理事 小畑さいち:青山学院大学元客員教授)
4. 寄稿：地域元気から日本再興を実現するために (中小企業診断士 児玉忠則)
5. 稽古照今・寄稿：童謡爺さんのどうよう語り 第五話・第六話 (作詞・作曲家 高橋育郎)
6. 解説「関連データ・用語・仕組み」：ステークホルダー資本主義とは
7. Blog 仕組みの群像：26年を経過した阪神・淡路大震災に想ふ
8. つばやき(編集後記に代えて)

注:担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ Japa は「新型コロナウイルス感染症特設コーナー」<https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25>を開設して、アーカイブすべき情報を随時アップしています。ご活用下さい。
また、アーカイブすべき情報があればご連絡ください。

1. コラム「論点提起」： コロナ禍(Risk)をチャンスにできるか如何

新型コロナ禍ウィルスの感染拡大が広がる中、第2回目の緊急事態宣言が出され、今現在も宣言下であるが、第1回目ほどの緊迫感がない。パンデミック・リスクを「変わる Chance」と捉えた新たな状態への移行意欲もさほど感じられない。結果して、平時対応で非常時対応をしている“軋み”があちこちで露呈している。

冬場における第三波が確実視されていたにも関わらず、十分な対策準備がなされず、第三波の渦中に対策が模索されている。感染波及を止める最大の対策が移動・接触の抑制にあるにもかかわらず、真逆の「GoTo キャンペーン」が「命と経済の両立」ということで実施された。非常時への切り替えの仕組み、非常時における政策トライアージができる仕組みづくりが求められている。

パンデミック対策として、感染拡大の予防措置と、それでも感染拡大した時の措置、要するに「レジリエンス(適応力)」が不可欠である。予防措置の基本は、リアルタイムの感染者の把握であり、そのための感染検査(PCR 検査、抗体検査、抗原検査)、追跡アプリが欠かせないが、その実施がおぼつかない。EBPM(Evidence-based Policy Making、エビデンスに基づく政策立案)を標榜しながらも実態が追いついていない。こういう非常時にこそ、冷静に科学的データに基づき政策判断して実行することが必要である。PDCA サイクルから、OODA ループへのシフトが問われている。
[参考] 内閣府における EBPM への取組 <https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html>
日本を支配する呪縛「PDCA」は日本ガラパゴスの概念。激変する現代社会では新しい理論が必要
松井克明 2018.10.24 HARBOR BUSINESS Online <https://hbol.jp/177097>

本格的な予防には、ワクチンの開発・接種が決め手となるが、日本企業によるワクチン開発は、海外企業に大きく後れを取っている。このため、国が海外のワクチン開発企業と供給契約を締結しているが、供給が滞るリスクが内在する。救いは、英製薬大手アストラゼネカが日本の国内メーカーに委託生産(要するに国内生産)し、新型コロナワクチンの量産準備に入ることである。今回のワクチン開発のスピードは驚異的な速さであり、イノベーションが起きている。IT 分野だけでなく、医薬分野においても日本の遅れが露呈している。イノベーションするしかない。

感染した後の隔離・治療措置の基本は、感染者の病院での受け入れにあるが、なぜか世界トップクラスの病床数を誇る日本が、他国に比べると少ない感染者発生状況にも関わらず、医療崩壊を招きつつある。感染者を受け入れた病院が経営危機に陥っている。これはあきらかに仕組み／制度の欠陥を証左するものであり、全体最適の観点から仕組みづくり／制度設計を行って欲しい。

コロナ禍により、需要が消えた業態がある一方で、コロナ禍で需要が興きた業態もあり、今後、さらに大きく需要構造がシフトするのは必至である。そうした需要構造の変容(Chance)を見通し、業容興し(市場興し)に向けて、企業が変われるか。内部留保を抱えている大企業がベンチャー企業と連携して、コロナ禍後を見据えたイノベーションを起こせるか、変革が急務である。

官も民もそして個人もコロナ禍(Risk)をチャンスにするために肚を括れるか如何。

2. キュレーション「関連情報&Topics」:コロナ禍×イノベーション×地方創生

▼The Regional Action Group for Japan 「日本の視点:『実践知』を活かす新たな成長モデルの構築に向けて」 WORLD ECONOMIC FORUM 2021年1月

http://www3.weforum.org/docs/WEF_JP_FINAL_RAGJ_Report.pdf

コロナ禍を受け、世界経済フォーラム(WEF)は「グレート・リセット(The Great Reset)」と称するイニシアチブを創出し、取り組みを進めているが、その一環として、「WEFに参加する日本のリーダーが集結し、日本リージョナルアクショングループを立ち上げ、コロナ禍への対応、コロナ禍からの回復戦略の方向性、コロナ禍収束後に世界が目指すべき姿などについて定期的に対話を重ね、日本が考える“グレート・リセット”のあり方を提言」したのが本報告である。最近注目されている「ステークホルダー資本主義」(後述 6. 解説「関連データ・用語・仕組み」参照)に係る日本の伝統的「実践知」を念頭に、「日本がポストコロナ時代に向けて実行すべき4つの“グレート・リセット”(意識・企業文化・経済・グローバルな連携・協力のフレームワークのリセット)を提案」している。確かに課題認識、提案内容はそのとおりであり、枠組みの理解の参考になる。しかし、「アクション」を標榜するなら、なぜ、コロナ禍以前にもグレートリセットする機会(リーマンショック、阪神・淡路大震災、東日本大震災・福島原発事故等)があったにもかかわらずリセットできなかったのか。結果して、日本でなぜイノベーションが興なかったのか。業界・産業界ではなく、突き抜けた個の起業人・企業が沸き起こるような仕組みづくりに向けてのグレートリセットこそが必要ではなかろうか。経済同友会の「2021年 年頭見解」にも「今われわれが持つべきは、過去を断ち切る覚悟と“ありたい未来”を自ら描き出す意志である。」と言及している。まさしく「自ら」と云う一人称で考えるリセットこそが肝要ではなかろうか。世界の変動する潮流の中でいろいろ考えさせられる。

[関連資料] イノベーションによって、経済社会の再設計に踏み出す1年に(2021年 年頭見解) 経済同友会 2021年1月1日 <https://bit.ly/2MiNRrO>

▼森を日常にする。コロナ後の世界に求められる「癒し」のローカルツーリズム 2021/01/23 12:00 Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/39267>

欧州に移住し、現在、イタリアに居住している女性社会起業家による記事である。コロナ禍後は、「また、人は必ず旅に出るだろう。しかし、今後も世界のツーリズムの需要は、単なるレクリエーションや気分転換、たまの贅沢を目的としたものから、もっと普遍的に“健康な心と体で幸せに生きたい”という人間の根源的な欲求に即したものになっていくことは違いない。」と云う。そして、「森のリトリート」(Retreat: 仕事や日常生活から一時的に離れ、疲れた心や身体を癒す過ごし方)を実践している「株式会社森へ」<https://morie.co.jp/>の創業者山田博氏の活動を通して、コロナ禍後のツーリズムの方向を説いている。「セルフメディケーション、日常的なエコセラピー、ウェルネストラベル」等々、なるほどと思う。「エコセラピーとは、人と人だけでなく、環境や地球そのものと深いつながりを持つべきだという考えに基づいたアプローチのケアプログラムであり、特に“つながりを感じる”ということが最大の目的と言われている」とのこと。そして、「その土地にしかない文化 x エコセラピーについて意欲的に創造力を働かせて、オリジナルな価値を打ち出せれば、世界中の人が癒されに来る日本のツーリズムの未来の可能性はもっと広がっていくだろう」と提言している。数十年後には総人口が減少し、非居住地域が増え「森化する日本」において、最大の土地利用空間である「森(深山・里山)」をどう活かすか、いろいろ想起させられる。

▼デザインフィクションで型破りな構想 =イーロン・マスク氏も実践する未来予測= 2021年01月21日 リコー経済社会研究所 http://blog.ricoh.co.jp/RISB/society/post_646.html

この記事は、スペースXやテスラを率いる今最もホットな実業家イーロン・マスクが用いていると云われる「デザインフィクション思考」を入り口に、未来予測手法をその変遷とともに紹介している。懐かしいデルファイ法、シナリオプランニング法、ホライズンスキャンニング法、ロードマップ法から、現在、喧伝されている「集合知を活用する」デザイン思考、そしてイーロン・マスクが使っているされる「不連続な未来を予測するためにSF的に極端未来の姿を夢想しストーリーを作成する」デザインフィクション思考、さらには「極端に悲観的な未来を想像して問題発見する」スペキュラティブデザイン思考等々。最後の2つは、いずれもbackcasting手法であり、時代は過去の単なる延長線上にはないことを示唆している。そして、デザインフィクション思考の先駆的实践事例が紹介され、「壮大な構想力と、実現に向けた情熱」を知る。しかし、こうした発想・構想は、鉄腕アトム等のSF漫画の世界に親しんできた日本人にこそ適しているのではなかろうか。期待したい。

▼科学技術・イノベーション基本計画について(答申素案) 令和3年1月20日 内閣府

<https://bit.ly/3sXcmvw> 概要 <https://bit.ly/3sYMxLF>

国としての第6期の基本計画策定に向けての素案であるが、上記のデザインフィクション思考と比較したときのワクワク感が全く感じられないのは何故か。考えるに、やはり未来社会の構想力ではなかろうか。次代を担う若人、夢想到に優れたSF作家・漫画家等でこうしたことを語り合う場ができれば全く違った未来社会像が描かれ、そこに着想を得たイノベーションテーマ、そしてそれを実現する科学技術という流れができれば、ワクワクする。鑑みるに、ノーベル賞受賞対象の科学技術は総じて研究者が若かりし頃の研究成果であることを今一度思い起こす必要があるのかもしれない。下記の参考資料も併せて読むと色々と思わせられる。

参考:科学技術はすでに振興している だから付加価値を付けていくプロセスがイノベーションだ 総合科学技術・イノベーション会議 上山隆大常勤議員インタビュー 2021年1月 JST 産学官連携ジャーナル 2021年1月15日 <https://bit.ly/2YnvO6w>

参考:これからの50年で目指す未来「100億人・100歳時代」の豊かで持続可能な社会の実現 2021年1月 三菱総合研究所 <https://www.mri.co.jp/50th/columns/topics/no02/pdf/report.pdf>

▼最少限の言葉で最大限に。編集者に学ぶ「価値を増やす4原則」 Forbes JAPAN 編集部

2020/08/23 20:00 <https://forbesjapan.com/articles/detail/36458/1/1/1>

最近、「説明不十分」等々の言葉が国会界隈で流布しているが、それと同じように見えて真逆のことを語っているのがこの記事である。人生におけるすべての物事において、最大限の力を発揮したいなら最小限に“編集”し“凝縮”することが必要だというベストセラー『エッセンシャル思考』著者のグレッグ・マキューンに『編集の4つの原則』を聞いたインタビュー記事である。「すぐれた編集技師は、重要なものがいやでも目に入ってくるようにするのだ。余分なものを排して、見るべき要素だけを観客に提示するのである。意味のある全体像ができあがったら、次のプロセスは余分なものをすべて切り捨てることだ。」「削らなければ本質は見えてこない。」そして、「人生が今よりずっとクリアになる編集の4原則として、1. 削除する 2. 凝縮する 3. 修正する 4. 抑制する」を説明している。元々、削るものも見当たらない哲学・思想・ビジョンの場合はどうしようもない。「説明が足りない」「フェイクが多い」昨今、考えさせられる記事である。

3. 紹介「海外に学ぶ」：芸術ハコモノでイメージ転換再生 ス페인・ビルバオ その2 (Japa 理事 小畑きいち：青山学院大学元客員教授)

ビルバオ・グッゲンハイム美術館は高い評判を得て、ビルバオ市の再開発計画のシンボルと見られるようになったが、ビルバオ市中心街を主とした再開発は、衰退地域の再生、人の移動を快適にする公共交通網整備、産業基盤整備、住居環境整備、公共・文化整備などを含むビルバオ都市圏の大規模で総合的な地域振興整備計画とされた。

ビルバオの発展は、鉄鋼業とネルビオン川の水運の賜物とされていた。その鉄鋼業が衰退し、さらに災禍として、1983年にネルビオン川による大洪水災害が街を襲った。河川に面した区域の被災が甚大で復興に巨額財源が必要な状況に直面した。ビルバオは産業衰退と災害の二重苦に直面し、後には引けない大決断を迫られ、都市の復興・再生による街づくりの方向転換が急務となり回避できない状態となった。1987年に災害復旧のための都市復興計画案を本格的に検討した。

防災・減災の街づくりに必要とされる空間スペースを考慮した余裕のある街の大改造に合わせて、川沿いのクルマによる交通渋滞と環境汚染問題の解消のために、都市公共交通整備として、LRTと地下鉄による市内を快適に一巡できる公共交通網整備、またネルビン川により分断され旧市街と新市街との両河岸間のスムーズな移動のために橋が少なく移動のあい路となっていた交通路としての橋の増設の整備案など、大規模な都市改造案となった。

計画実施のためには多大なコストが掛かる。そこでビルバオ市・県・州は一部財務計画を PFI・PPP (Private Finance Initiative 公共事業・資金の民間主導、Public-Private Partnership 公民連携) を導入し、民間資金と経験の活用実施することを決定した。

再生計画は短期、長期計画を組み合わせ 1990年代から数十年案とした。交通基盤、公共施設機能、用途別区画などを基本理念とする構想から、旧港湾、市内公共交通網、架橋・道路網、複合公共施設、空港、テクノパークなどの都市インフラ整備を取り組む総合的なものとした。注目の1997年フランク・ゲーリーが設計したグッゲンハイム美術館以外にも、このような構想に基づき市街の改造が進められた。

かつて、河岸の工業地域であったアバンドイバラ地区を中心に 1990年代以降に順次再開発がなされ、ネルビオン川沿いを中心に再開発が実施された。ビルバオの都市再生には、多くの著名な建築家によるユニークな作品が続々と建設され、市街景観を一新した。その主要なものとして 1995年「地下鉄メトロ駅」(ノーマン・フォスター設計)、1997年「ビズビリ橋」(サンティアゴ・カラトバ設計)、国際会議場協会によって 2003年に「世界最高の会議場」に選ばれた 1999年竣工の「エウスカルドゥナ国際会議場・コンサートホール」(フェデリコ・ソリアーノ、ドロレス・パラシオス設計)、2000年「ビルバオ空港旅客ターミナルビル」(サンティアゴ・カラトバ設計)、2004年



現アバンドイバラ地区

スビアルテ・ショッピングセンター(ロバート・スターン設計)、2008年「イソザキアテア」(磯崎新設計)、2012年イベルドローラ・タワー(シーザーペリ設計)等々。



奇抜な地下鉄出入口 2003年「世界最高の会議場」に選ばれたエウスカルドゥナ(国際会議場) ビルバオ市内トラム ビルバオ空港ターミナル

世界の一流建築家によって街の再生を行い、現代建築物の見本市の様相を呈し、一般観光客以外にも、都市デザイン関係、建築関係者などにも注目され人気を博し来訪者が増加している。

地元の強い要望の産業振興についても、市外のビルバオ空港周辺にテクノパークを建設し、バイオ、電子機器、IT、通信、運輸、宇宙産業などの誘致を推進している。このような振興再生計画は、ハード中心の都市再生であったが大きな成功を収めた。



ビズカヤ(Zamudio)テクノパーク

このアプローチは文化活動を中心とするソフト指向のフランス・ナント市の都市再生と対極をなす。このような再生計画により、ビルバオは、来訪者増と新産業創出による経済効果に加え、「住民が、街に対する誇りを回復したことが大きい」とも指摘される。

ビルバオは2014年にUNESCOに食文化も含めた「デザイン都市」として認定された。増加した観光客を含む来訪者などが市街回遊の楽しみを一層増すために、街回遊のための遊歩環境整備と食べ歩き環境として、ビルバオはバスク地方の特徴を活かし「美食体験、バスクの個性、アイデンティティ、多様性」という統一スローガンを掲げて、バスク地域の特有の産品を他地域の産品と区別するための「EUSKOLABEL」認証マークの制度の策定など設定した。バスクの食文化とその産品のブランディングを図って、美食の街として周辺のサンセバスチャンなどと「文化・アイデンティティ・海岸・自然・美食を統合したユニークな観光地を目指す」として観光キャンペーンを行い、バスク独自の地域食材を活用した食文化をPRすることで、スローフード・ビスカヤ運動を発信し、ビルバオ市を食文化都市としてブランド発信し、観光客の誘致にも力を入れている。

[参考・出所]

- (1) <http://www.bilbao.eus/>
- (2) <https://www.designcities.net/city/bilbao/>
- (3) “バスク地方の歴史”明石書店 モンテロ, マヌエル(萩尾生訳)2018
- (4) “欧州の CreativeCity のチャレンジ”ニッセイ基礎研究所 吉本光宏 2004
- (5) “Insight Guides Pocket Bilbao” Insight Guides 2020

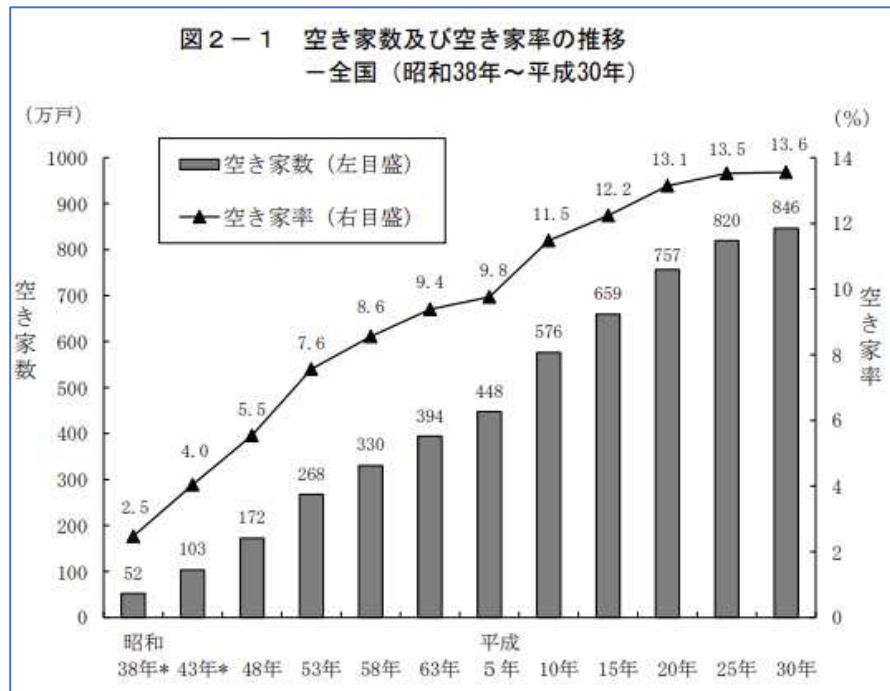
4. 寄稿：地域元気から日本再興を実現するために 中小企業診断士 児玉忠則

[元地方銀行。史上最年長(71歳)で中小企業診断士の資格取得]

地域の衰退が著しい。更に困ったことには、それを住民が甘受し、現実を見ないままに過ごしていることである。1年間100人の人口減少程度だと、街中の通りを歩く人にはさほど変化が感じられない。しかし、10年前と比べると、例えば私の出身地でも、お正月には子供たちの賑やかな歓声が通りに溢れていたが、現在では閑古鳥状態で殆ど人影すら見かけることも無いが、このまま推移すると、10年先にはそれこそ、多くの地域がゴーストタウン化して、寂れた空き家とシャッター通り商店街が林立するのみとなりうる。

深刻な事例として空き家問題に触れると、平成31年4月26日総務省統計局発表では、「居住世帯のない住宅」のうち、空き家は846万戸と、平成25年と比べ、26万戸(3.2%)もの大増加となっている。

総住宅数に占める空き家の割合(空き家率)は13.6%と、平成25年から0.1ポイント上昇し過去最高となっている。



空き家数の推移をみると、これまで一貫して増加が続いており、特に少子高齢社会が急速に展開し、人口減少が加速化する地域において深刻な課題である。

空き家が長く放置されると、①景観上の問題、②シロアリやネズミの増加による衛生上の問題

、③倒壊などによる保安上、④防火上の問題、⑤犯罪に利用される(高齢者・子供たちが不審者に

表2-2 空き家率(二次的住宅を除く)
—都道府県(平成25年, 30年)

空き家率の高い都道府県				空き家率の低い都道府県			
		平成30年	平成25年			平成30年	平成25年
1	和歌山県	18.8%	16.5%	1	沖縄県	9.7%	9.8%
2	徳島県	18.6%	16.6%	2	埼玉県	10.0%	10.6%
3	鹿児島県	18.4%	16.5%	3	神奈川県	10.3%	10.6%
4	高知県	18.3%	16.8%	4	東京都	10.4%	10.9%
5	愛媛県	17.5%	16.9%	5	愛知県	11.0%	12.0%
6	山梨県	17.4%	17.2%	6	宮城県	11.5%	9.1%
6	香川県	17.4%	16.6%	7	山形県	11.6%	10.1%
8	山口県	17.3%	15.6%	8	千葉県	11.8%	11.9%
9	大分県	15.8%	14.8%	9	滋賀県	11.9%	11.6%
10	栃木県	15.6%	14.7%	10	京都府	12.3%	12.6%

出典:平成30年住宅・土地統計調査 住宅数概数集計結果の概要 <https://bit.ly/2LSIBL9>

連れ込まれても解らない)などの問題を引き起こし、地域住民としては、いち早く解決を求めたいところである。

一方、空き家率の改善として、自治体による空き家の解体処分が進められているが、SDGs の観点から、住宅を産業廃棄物として処分することは、資源の無駄遣いとなるのでは。やはり、空き家を改修・修繕して、限られた地域社会の資源としての有効活用を検討すべきである。

地域社会のみならず、日本全体のゆがんだ文化＝社会より自分の家さえよければとの个人中心主義・排他主義・行き過ぎた個人情報保護を盾にした我関せずの蔓延で、都市部においても孤独死が増加するなど、あまりにも身勝手な気風の改善に活用するためにも、空き家を地域社会の集会所として、近隣の住民、主に孤老が集い、談笑をしつつ、お互いの安否確認と励まし合いの気風・習慣化を起こすべき時と思う。元は農耕民族である日本では、お互いの事はもとより、その家の成員に至るまで、近隣の住民が熟知して、幼子や高齢者は近隣住民の共通関心事として話題にして、自然に見守られている温かさがあった。

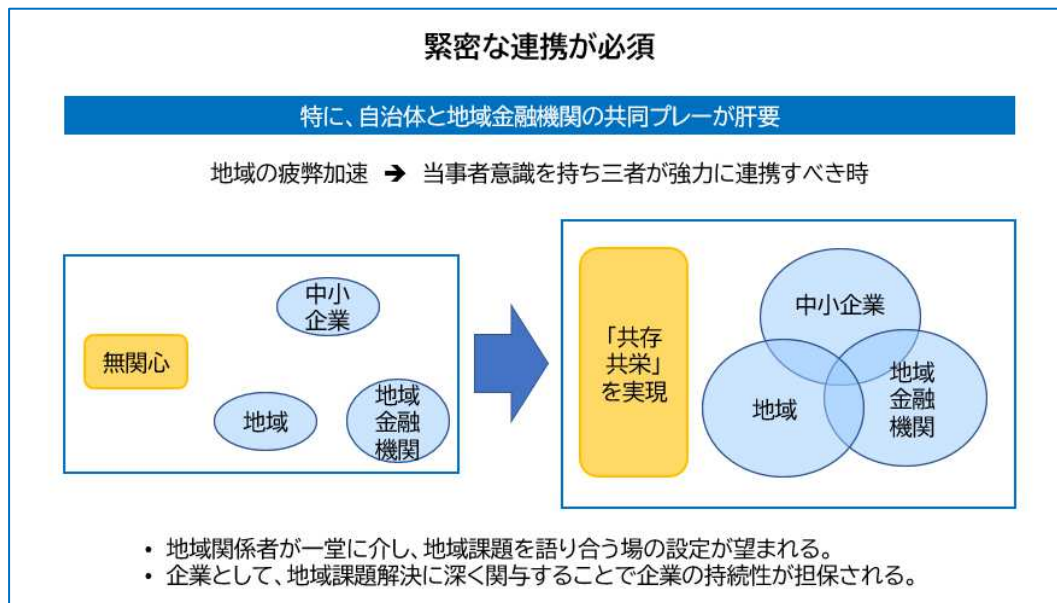
かつての長屋では井戸端会議が情報連絡場所として機能し、地域内の緊密な連携体は、人目を嫌う、よそ者の犯罪者としてはやりづらく、露見するリスクがあったと思え、犯罪抑止力であった。いままでは、年間数百億円もの大金がオレオレ詐欺による高齢者の被害が後を絶たない有様。悲嘆にくれるお年寄りの泣き姿はTVニュースでもお気の毒で直視できない。

地域では人口減少が深刻だが、加えて人間関係の疎遠化が深刻であり、これは日本全体の問題である。量の減少は質で補う、即ち、密接に触れ合うことで、お互いの価値を高め合えば、量の不足以上を充分カバー出来る。これは特に高齢者に重要である。体の衰え、社会への関心低下などから、家に閉じ籠り、外出しない高齢者はますます、身体機能が劣化し、言語・摂食障害者となる。介護保険・医療保険財政が更に悪化し、現役世代の負担増が止まらない。

外出機会を増やすには、近隣住民同士が触れ合う場所・機会の増加を促す仕組み作りが必要である。即ち、近隣に集会所・寄合所を設ける、それに空き家を利活用する。現存する資産を取り壊す前に、その活用方法を皆で話し合う機会を創造する。

それには、地域内で音頭をとるリーダーが必要であり、その役割を企業のOBが担うべきと思う。定年後に地域社会のオピニオンリーダーが担える人材を輩出する事が、その企業の名声獲得(ブランド力になる。さすが、〇〇会社のOBだけの事がある)になるとの新たな社会的価値観・通念を普及すべきと思う。企業も自社の業績拡大一辺倒では、サステナブルたりえないことは、大手企業の昨今の事例で明らかである。やはり企業本来の目的たる人財育成・社旗貢献こそが肝要である。

地域活性化には、第一義的な責任者として、地域と運命共同体たる地域金融機関・自治体・住民たるべきだが、その連携が薄く、敢えてリーダーとしての声出しをせず、ひたすら機運が熟すのを待つ姿勢である。そこで、以下のように連携を図式化した。



集会所では、人生を逞しく生き抜く知恵・情報を交換する、また、共にその集会所で学校給食時間のノリで規則正しく3食を一緒に食べることで、食生活の改善にもなる。孤老の多くは1日1食か、昨日の残り物で、簡単に食事する。これでは、栄養バランスも規則正しい生活習慣も実現がおぼつかず、人生百年時代の後半を寝たきりで過ごすことになる。「ADL・QOL」の実現にも程遠く、これでは若者達に将来の希望を持たせることは難しい。

現在はコロナ禍で3密を避けざるを得ないが、卑近な事例ですが、私は家に引きこもりを逆にチャンスとして、年明けから本を10冊以上買い込み、中学生の地理・歴史参考書から、論語、事業再生のアドバイザーを目指しての通信講座申し込みとともに、近所の公園の石段100段を10往復して千段の上り下りをつま先足、かつ、重い石をリュックに入れて負荷をかけて筋力と、体幹を鍛えている。100才越えの生涯現役・生涯学習を密かに期している。やりすぎではとの友人の忠告もあるが、高齢者が人生の良き模範を示さないと、若者中心に厭世観で満たされてしまうと、将来に夢も希望も持てない国民を量産する事になる。これは人口減少以上に深刻な問題となることを十分に認識すべきであり、この解消は、高齢者の人生課題と重くとらえたい。

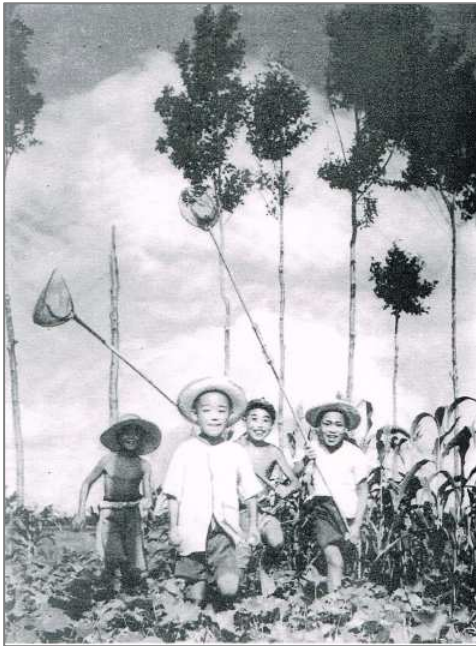
合計特殊出生率の減少と人口減少には、原因があって結果がある、その原因の元を絶たなければ改善しない。配偶者を見つけ、結婚して、子育てをして、明るい所帯を築き、この国に生まれてよかったとの幸福感を与える責任と義務があることを、中高年者は意識して、それを新たな残された人生の目標・夢として頑張れば、「知らず知らずにいつの間にか元気で百歳を超えていた。」との理想的な生甲斐の実現になる。

私は昨年1月29日、脳卒中で開頭手術を受け、半年間ものリハビリ入院といういずれも人生初の厳しい状況を体験したが、昨年12月には、新たに「地域活性化研究会」を広島県中小企業診断協会内に立ち上げ、現在、複数の自治体・企業に地域の空き家利活用による元気社会の実現と、脳の大病からの生還と健康長寿の在り方、生涯学習とは、等について講演中である。

5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第五話・第六話) 作詞・作曲家 高橋育郎

(第五話)

前回では、童謡が生まれたのには、やはりそれなりの下地ができていたという話をしたね。いきなり降って沸いたようにできたわけじゃないということなんだ。



時代背景とでもいうことだね。大正のあの時代は、大正デモクラシーが生み出した大正ロマンと呼ばれた時代だ。第一次世界大戦が終わって、誰もが自由と文化を望んだのだね。

それにしても三重吉は、童謡というジャンルを確立させたのだからすごい。童謡は世界に誇る日本の文化といわれ始めるまでに高めたわけだ。

日本の童謡のような歌のジャンルは、世界に例がないとまでいわれている。勿論、子供向けの歌があるにはあるが。

つまり大人が子供のことを思って、子供のための歌を作ったという意味でいっているので、イギリスでは「マザー・グース」というのがある。白秋が「まざあ・ぐうす」として翻訳し、紹介しているんだが、あれは日本でいう「わらべうた」なんだ。だから日本の童謡とはおもむきがちがうんだ。

どうだろう。いまの子供たちは、そういった文化の恩恵を、恩恵として喜んで受け止めているだろうか。はなはだ疑問だね。

もし、すなおに受け入れられ歌われていたら、世の中、こんなにまで殺伐とはしていないのじゃないかと思われてならないし、せつかくの文化資産を粗末にしているようで、もったいない話だと思うんだ。ここは大事な話だとも思う。勿論爺さんのような考えの人は大勢いる。ただ、時代のせいだといってしまえばそれまでだけど、大正ロマンの気風はもう少しとりもどしたいものだね。そりゃあ、あの頃とはだいぶ時代背景が違うからね。時代の趨勢というか流れには、なかなか抗しがたいものがあると思う。だからあの時代に帰れなんていうのは無理があろう。

それにしても近頃は、ますます安易になってきているようだね。批判がましくなってしまうが、とにかく面白くてとっつきやすいものにとびついてしまう。面白おかしければいいんだといった軽佻浮薄な風潮がみられてしょうがないんだ。芸術だの文化だの、そんなものはどうでもいいや、そういった類いの風潮だ。

こうした傾向、社会的風潮はどんなものかな。憂慮すべき問題だと思うのだが。いうまでもなく芸術は、人間性を豊にして高めてくれるものだ。

芸術は美の追求なんだ。美しいはいまどき、流行らない言葉だけど、美とはバランスなんだね。絵画然り、音楽もそうだ。バランスが崩れているところに美はないんだ。美の文字自体左右対称だ。仏教が真実を教えている。「かたよらないところ」とね。心身の健康もこのバランスからくる。病気はバランスの崩れが引き起こすのだ。

芸術性が失われてくると心はすさび、砂漠化してしまう。砂漠の中では生きられない。潤いがなければ人間も動物だって生きられはしない。そんなことは分かりきっていると思う。でも面倒くさがって、遠ざけている。その結果が残念ながら、見ての通りの現状だ。このままでいいのかと爺さんは思う。

「心に潤いと緑を」と、こう叫ばずにはいられない。オアシスがほしいのだ。健全な心身から、健全な社会は生まれる。そう思えてならないのだ。

童謡は心のオアシスになるのではないか。こう信じて、真の童謡活動を継続していかねばならない。童謡爺さんはそう思っているんだ。

近年は情操教育というのがなおざりにされているね。いま、教育再生の議論のなかでも、あまりとりあげられていないね。徳育もそうだ。徳育や情操教育は、人間形成の基本だと思う。もっと真剣に議論すべきだと思う。



こんなこといっていると何だか昂揚してきちゃうね。では、次号では、わらべうたや大正の芸術童謡の中味をみていこう。

- ※ 2014年 文科省は「道徳教育」の強化の実施に踏み切ることを提唱した。
- ※ 2016年から「生涯健康脳と音楽」のテーマで講演するようになった。右脳は音楽脳と呼ばれ、右脳と左脳のバランスを保つことの大切さを訴えるものだ。
- ※ 「わらべうた」は作詞作曲者不明の、いわば読み人知らずだ。この歌は、俺が作ったんだと、著作権を主張するものはいなかったんだね。

(第六話)

三重吉から「赤い鳥」の主筆を委嘱された白秋は、童謡詩の創作に並々ならぬ意欲を示して、取組んだのだ。その気持は分かる気がするね。そりゃあ、とにかく童謡という草分けの仕事が舞い込んで来たのだから、張り切らざるをえんと思うよ。

白秋が創作に当たって、まっ先に念頭に浮んだのは、伝統童謡であるわらべうただったんだ。わらべうたこそ最良のお手本だったんだね。

わらべうたは子守唄も合わせて、子供の心情がよく表れているんだ。子供は正直というが、理性より感情が勝っていて、善悪の判断が単刀直入なんだね。

生き物も簡単に殺してしまう。弱い者いじめもやってしまう。純粹無垢ながら、そんな一面も持ち合わせているんだ。感覚が鋭くて生きいきしている。「子供に帰れ」とか「子供は大人の鏡だ」なんていうこともいっている。白秋は子供の特性をよく掴んだ。やさしさと残酷さ、向う見ずかと思うと怖がりや、そういったちょっと矛盾した複雑さが入り組んでいて、うまくコントロールできないもどかしさ。そうした子供の心情を真正面から見つめたんだ。唱歌には見られなかったのだ。

唱歌では、花鳥風月が歌われ、忠君愛国など修身教育といった教育勅語を基盤とした教訓的な歌が重んじられたんだね。三重吉はそこを衝いたんだ。ちっとも情緒がないじゃないかとね。そして選者として「赤い鳥」をまかされた白秋は、そのあたりをよく心得ていた。そして、よくもまあといったくなるほど、たくさん作った。

いっぽう八十も負けず劣らずつくったね。やっぱり感心するほどの多作家だ。

ところで彼には童謡界のエポックになる作品がある。「赤い鳥」にデビューしたときに作った「かなりや」だ。「唄を忘れたかなりやは」誰でも知っている有名な歌だね。

この詞が発表されたのは大正7年の11月だった。

実は、三重吉は、はなから童謡に曲をつけて歌わせるなんてことは考えていなかったんだね。音楽はよく知らなかったから関心もなかったわけだ。標準的な日本人だったんだよ。でも、歌にして歌わせてみたいという気持が全く無かった訳でもなかったようだ。そこで、曲を付けるのであれば、当代一の山田耕筰がよいと思った。ところが、耕筰は外遊の予定があった。そこで、教え子の成田為三に作らせたのだ。



平成10年 東京・豊島区立小学校

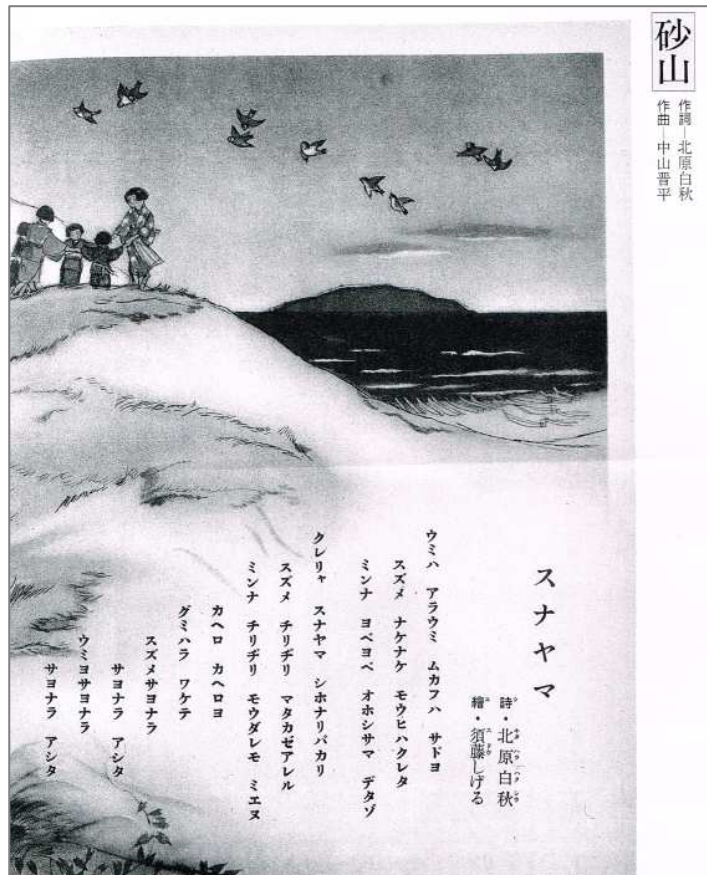
為三は、できあがった曲を小学生に歌わせようと、ある小学校を訪ね憶えさせて、三重吉を招いて発表会を開いた。彼は小学生の歌が始まると、目をこらし一心に聞き入ったんだね。ところが子供たちが、嬉々として一生懸命歌う歌声に、感動のあまり大粒の涙を流したというんだ。ほんとうに感動したことが伝わるシーンだね。

それから三重吉は、童謡は曲が付いて歌われるのがいいんだと、すっかり考えをかえたんだ。

でも、白秋はまだそういう気持にはなり切っていなかった。詞はリズムよくイントネーションを交えて読み上げることこそ生きるんだと主張していたんだ。実は「赤い鳥小鳥」に為三が曲を付けたんだが、簡単すぎたせいか「かなりや」ほどの感動はなかったんだね。

しかし、ここに山田耕筰が帰国し「赤い鳥」に着目してから、白秋に変化が見られるようになってきたんだ。

大正8年に「あわて床屋」を作曲した。ユーモラスなところが受けたが、白秋も気に入ったんだ。それから「この道」が大いに歌われ、それからというもの二人は名コンビになって「砂山」や「ペチカ」など多くの名曲を生み出していたんだ。白秋もついに曲の素晴らしさに気づき、童謡は歌が付いて生きてくると、すっかり意気投合した。やっぱりね。



- * 西条八十は、資産家の家に生まれ育った。父親は石鹼工場を営んでいた。しかし、長男が放蕩して、財産を失い貧乏のどん底に落ちた。そこから八十の苦労が始まった。そうした環境の中で「かなりや」の詩は生まれた。八十は、いつとき歌を忘れていたのだ。この詩は、三重吉から「赤い鳥」の選者にどうか声をかけられ、再スタートの希望の灯が見えたときに作ったものだった。
- * 白秋が「砂山」を作詩したころは、人気が高まって、あちこち講演を頼まれた。この歌は新潟市の小学校に呼ばれた時で、講演が終わったところで、生徒に取り囲まれ、みんなで、近くの寄居浜へ出かけ、生徒に歌を頼まれて作ったものだった。爺は、高校のとき2年ほど新潟市で過ごし、寄居浜の思い出を歌にしたよ。

(つづく)

6. 解説「関連データ・用語・仕組み」: ステークホルダー資本主義とは

ステークホルダー資本主義とは、「企業は株主の利益を第一とするべし」という「株主資本主義」とは違い、企業が従業員や、取引先、顧客、地域社会といったあらゆるステークホルダーの利益に配慮すべきという考え方である。具体的には、環境破壊の防止や、企業がオフィスを構える地域社会への投資、従業員への公正な賃金の支払い、労働者間の格差の是正、適切な納税などが求められている。」

出典:ステークホルダー資本主義とは? IDEAS FOR GOOD <https://bit.ly/39zmvXA>

ステークホルダー資本主義が注目されるきっかけは、米経済団体ビジネス・ラウンドテーブル(BRT)が2019年8月に発表した「会社の目的に関する声明」がきっかけで、2020年1月に開かれた世界経済フォーラム(WEF)年次総会(ダボス会議)でも重点テーマに据えられた。

ステークホルダー資本主義は、日本の近江商人の「三方よし」(売り手よし、買い手よし、世間よしの三つの「よし」)に通じ、日本はその実践知があると云われる。しかし、例えば、フェアトレード(開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易の仕組み)の普及はまだまだである。加えて、近年は最大のステークホルダーである「従業員よし」が欠落している。1990年以降、非正規社員の拡大等により、日本の賃金水準が上がらず企業の内部留保のみが積み上がったことはその証左である。このため、最近では、「従業員よし」を加えた「四方よし」を掲げる企業も現れている。「将来よし」とする「四方よし」も云われている。いずれも、SDGSにつながる。

参考:世界で脚光「ステークホルダー資本主義」、企業経営の潮流になるか 2020年09月24日 <https://newswhitch.jp/p/23911>

開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」 FAIRTRADE JAPAN <https://www.fairtrade-jp.org/>

「三方よし」より「四方よし」 note 2020/05/02 <https://bit.ly/36u9CfD>

SDGsは「四方よし」(一社)SDGs九州チャレンジ <https://bit.ly/3ai7s3M>

経団連は、こうした流れを受け、「これまでの成長戦略の路線に一旦、終止符“。”を打ち」、新成長戦略(2020年11月7日) <https://bit.ly/2Y7SyaG>の中で、「サステナブルな資本主義」を掲げ、その中で、ステークホルダー資本主義の考え方の導入を表明している。

このステークホルダー資本主義に対峙するのが、「国家資本主義」である。そして、それらを包摂する可能性を秘めているのがビッグデータに依拠する「データ資本主義」かもしれない。

参考:ステークホルダー主義には同調せず、世界の主導権を狙う中国 日本総合研究所 調査部 上席理事 呉軍華 2021.1.18 金融財政事情 <https://bit.ly/3cfTMss>
データ資本主義とは何か 野口悠紀雄 証券レビュー 第61巻第1号 <https://bit.ly/3ptnH4w>

7. Blog 仕組みの群像：26年を経過した阪神・淡路大震災に想ふ

先月、阪神・淡路大震災から26年が経過した。四半世紀を経て、ようやく震災復興事業が一区切りを迎えたが、この間の膨大な貴重な記録がアーカイブしきれていない。平時からの非常時対応の備え(切り替えの仕組みを含めて)とその教訓を承継すべくアーカイブの重要性に思いを馳せ、ブログにしたためた。

この過程で、久しぶりに、当時作成した「阪神・淡路大震災3か月後報告」を引っ張り出して眺め、当時の情報収集の難しさを思い出した。現在は、一人でこうしたアーカイブサイト[例えば、コロナ禍のアーカイブサイト <https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25>]がつかれる。隔世の感がある。

▼ Blog 仕組みの群像:26年を経過した阪神・淡路大震災に想ふ
<https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

8. つぶやき(編集後記に代えて)

毎年恒例のユーラシア・グループによる「2021年10大リスク」<https://bit.ly/3iRqQsl> が発表(2021年1月4日)された。

- 1 46* (注釈 第46代アメリカ大統領)
- 2 コロナ後遺症
- 3 気候問題:ネットゼロとGゼロの交差
- 4 米中の緊張は拡大する
- 5 グローバルデータの因果応報
- 6 サイバースペースの転換点
- 7 孤立無援のトルコ
- 8 中東:原油価格の低迷が打撃をもたらす
- 9 メルケル後の欧州
- 10 混迷が続く中南米

「日本の10大リスク」はどうなるのか。「1.99*」? 当たるも八卦当たらぬも八卦。

編集発行人:Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
 問合せ・連絡先:info@japa.fellowlink.co.jp
 発行元:Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

Copyright © 2021 Japa 日本専門家活動協会